

エイサー大学 第4回

チョンダラーの 足跡をたどる

時：2021年2月6日（土） 午後3時～
所：エイサー会館（沖縄市）

久万田 晋（沖縄県立芸術大学附属研究所）

I

1. チョンダラーとは？

現在：エイサーにおける滑稽・道化役



2

エイサー道化役の呼称 1990年時点

大宜味村喜如嘉	道化2人	旗もち
名護市安和	道化2人	キジムナー
金武町金武	道化2人	ワクヤー
石川市美原（以前）	道化2人	メモヤー
読谷村比謝	道化5人	
沖縄市安慶田	道化2人	
沖縄市登川	道化4人	赤サナジャー
具志川市天願	道化1人	名称なし
具志川市赤道	道化0人	チョンダラー
具志川市具志川	道化5人	チョンダラー
与那城村平安座	道化6人	チョンダラー
北谷町桃原	道化1人	チョーギナー
北谷町江口	道化2～4人	サナジャー
宜野湾市普天間三区	道化1人	トックリモチヤー

ぐしけんかなめ編『エイサーアンケート集約』1990年より

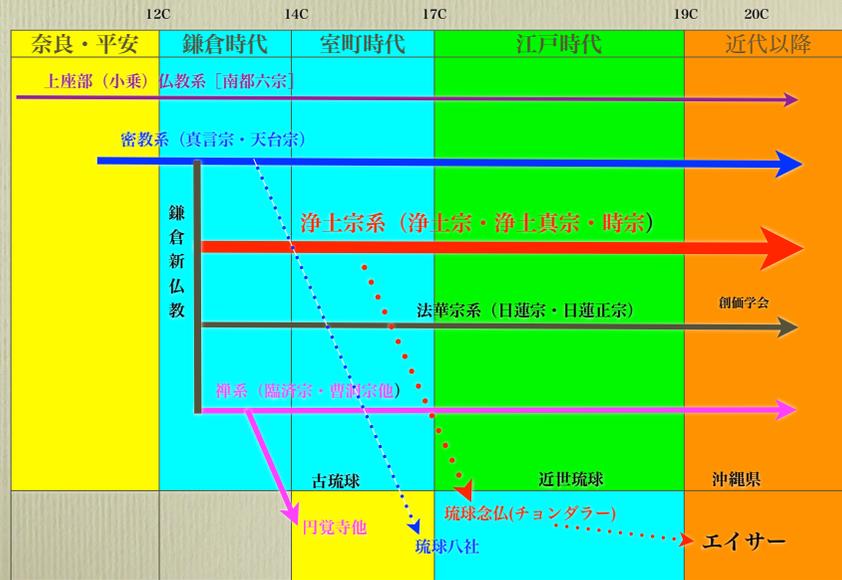
3

本来のチョンダラー（京太郎）とは？

- 本土から沖縄に渡来したという流浪芸能集団。様々な**念仏歌謡**や、**万歳芸**、**人形芸**をなりわいとして、沖縄各地を巡った。
- 沖縄本島各地で、チョンダラーの伝承した**念仏歌謡**が地域の青年達に伝えられ、田盆のエイサーで歌われるようになった。
- 大正年間（1910～20年代）、山内盛彬、宮良当壮らの調査研究によって、チョンダラーの実態や伝承芸能が明らかになった。
- 沖縄戦の混乱を経て、戦後チョンダラーの末裔たちの消息は不明となった。
- 戦後のエイサーコンクールの中で「見せる」芸能として発展したエイサーにおける**道化役・補佐役**を**チョンダラー**と呼ぶようになった（この30年？）。

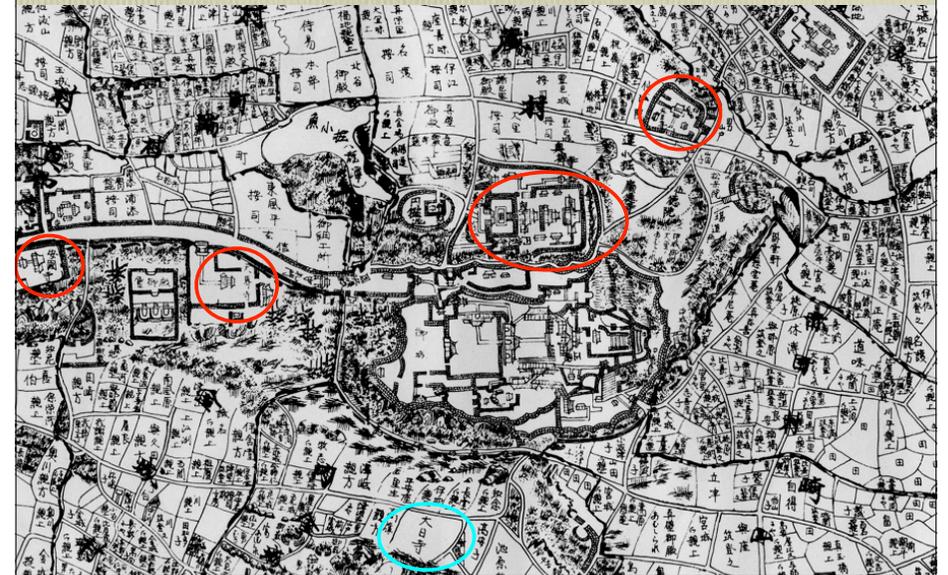
4

2. 日本仏教各派の展開と琉球への伝播



首里における寺院配置

首里古地図 (1700)



袋中上人

袋中 (たいちゅう、1552-1639) は、江戸時代前期の浄土宗の学僧。陸奥国磐城郡出身。まだ見ぬ仏法を求めて明に渡ることを企図し、渡明の便船を求めて琉球王国に滞在 (1603-06)。滞在中に琉球での浄土宗布教に努め、創建された**桂林寺**の住持となる。渡明の便船が見つからず帰国した後、京都三条の檀王法林寺をはじめ多くの浄土寺院の創建や中興をおこなった。著書に『琉球往来』、『琉球神道記』全5巻など。

本国念仏者、万曆年間、尚寧王世代、袋中ト云僧 (浄土宗、日本人。琉球神道記之作者ナリ) 渡来シテ、仏教文句ヲ、俗ニヤハラゲテ、始テ那覇ノ人民ニ伝フ。是**念仏ノ始**也。(『琉球国由来記』巻4より)



『袋中上人肖像画』
(沖縄県立博物館・美術館所蔵)

テーラシカマグチ



金武御墓
(テーラシカマグチの墓 豊見城市)

• 彼 (註：袋中上人) は慶長役の8年前52歳の時、支那に留学の目的でまず琉球に渡り、尚寧王の知遇で首里城外の桂林寺に3年間も留まり、念仏の歌もフシも郷土化して国人に教えた (中略) さらに伝説上の人物**テーラシカマグチ**と共同で148種の念仏歌を作ったと云われる (口伝されたのは約20種)。

• **テーラシカマグチ** は袋中上人の協力で148種の念仏歌とそのカエシを作った。彼は強力でその冠の重さが45斤もあった。金武御殿に祭られている。
(『山内盛彬著作集 第2巻』p.222、226)

3. チョンドラー

京太郎。首里アンニャ村に居住。

ニンブジャー（念仏者）、ヤンザヤー（万歳者）とも呼ばれた。

正月には万歳、節々行事には嘉例祝い、念仏を唱えて家々を回った。

人形（フトウキ）を持ち回り歩いたという。

絵姿女房的起源譚、および京から琉球へ渡来したことを伝承。年代は不明。

→**チョンドラー**の伝承していた**念仏系歌謡**をムラの青年が受け継ぐ
エイサーの基本 念仏歌《七月念仏（継親念仏）》
門付け歌《サウエン（一合二号）》

9

チョンドラーの渡来と伝承

当国、京太郎、准傀儡者歟。昔日、京都ノ人渡来、教之乎。又京小太郎ト云者、其業ヲ作りタルヤ、不可考也。

（琉球国由来記（1713） 卷四）

10

絵姿女房的起源譚 （首里アンニャ村のチョンドラーが伝承）

京都の街近くの岩窟に貧乏な夫婦と子供の三人が暮らしていた。夫はその妻があまりに美人なので野良仕事もいやがるほどだった。仕方がないので妻の絵姿を書き、畑に棒を立てその絵を掲げて見ながら野良仕事をしていた。ところがある日突風が吹いてその絵像を巻き上げていった。その絵像は宮古のお城の庭中へ落ちた。それを拾った役人がお上に差し出した所、お上はこれをご覧になって、こんな美人がどこかにいるに違いないと京の内外を家来どもに探させた。そして岩窟の中に子供と食事していた妻をさらっていった。畑から戻ってきた夫はそれを聞いて落胆したが、もう一度妻と会いたいと思い、日夜苦心して人形芝居と万歳を案出し子供にも仕込んだ。

正月元日の朝、**父子は京のお城へ乗り込んで、その芸を披露して喝采を浴びていた。**このときお上の息女となっていた妻は、早くも自分の夫と子であると気付いたがそれを口にも出せず、角袋（ちぬぶくる）を作り、底に小判を入れ、上の方に米を盛り小判を隠して父子に与えた。

その後、父子はお城へ行くたびに元妻は角袋を作り小判名を与えていたが、ついに発覚して父子をこの地に置くことはお上の御意ではないということで、ついに沖縄島に島流しになった。**それ以来彼らは京都太郎といわれて、人形芝居や万歳や念仏を唱え、鉦を叩きながら各地を廻り歩いた。**

（宮良当社『沖縄の人形芝居』より抜粋）

11



12

『琉球風俗図』 葬式

『琉球風俗図』 葬式・念仏



鎌倉芳太郎写真資料より「十七八躍人形、子持人形」



図23 ↓ 淡路国名所図絵



図17 ↓ 人倫訓蒙図彙



5. チョンドラー（京太郎）スパイ説

1609年の慶長役に、**薩摩軍のスパイ**として、役前に渡来したものだとする。スパイをカバーするために殊更に京都云々と称したらしく、鳥刺し舞なども、九州あたりに多い古謡とよく一致するのを見ても、薩摩出だと察することができる。彼等は戦争前は人形を舞わしながら、高官の家宅を門付して探ったり、また戦争が始まると

薩摩艦のパイロットとして、那覇港から北部の運天港に誘導したり、さらに薩軍の上陸後はその案内までもした。政庁としては彼等を捕えて死刑にでも処すべきだが、国際問題化するのを恐れてだまっていたのは、いよいよ燃える火に油をそそいだような結果になった。戦後は排しそうなものだが、王朝の平等所（裁判所）の秘密探偵として使ったことは、名案か迷案かは知らないが、適材を適所に使ったものだ。**しかし民衆のうけは良くなかった。**

(『山内盛彬著作集 第2巻』 p.266)

宇野小四郎の見解

傀儡師隠密説は沖縄の京太郎に限ったことではない・・・

巡回遊行する人々に体するべく然としたものではあるが、ある恐れ、何か秘密の部分を持った油断のできない奴らといった感情が働いている。これは裏をかえせば蔑視と差別の感情でもあった。

(宇野1984、p.17)

6-1. 宮良当壮 (1893-1953) のチョンダラー調査

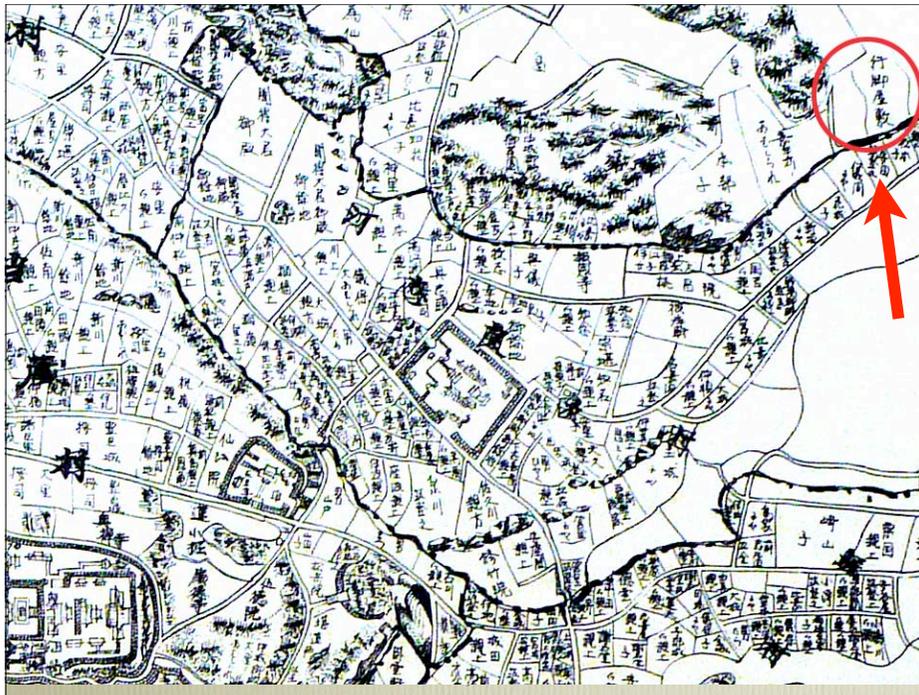
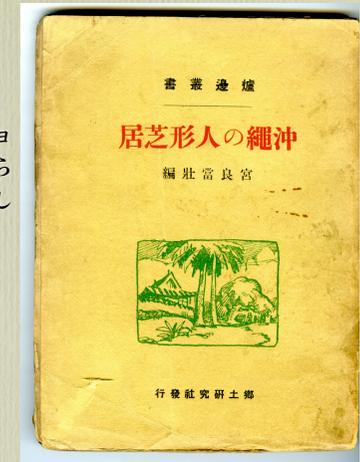
・宮良当壮『沖縄の人形芝居』1925年。

・1924年6月18・19日、首里アンニヤ村のチョンダラー玉城太郎および山（ヤマー）の二人から採録、解説と訳文を添えて翌年一月炉辺叢書として出版。

・収録詞章

- 1.御知行の歌
- 2.山伏
- 3.唱門の詞
- 4.念願の文句
- 5.京の下り（人形）
- 6.浄土宗の文段
- 7.浄土宗が孝論
- 8.継親念仏
- 9.長者の流れ
- 10.馬舞者
- 11.鳥刺し舞

付録「京太良詞曲集」。



四 アンニヤ村の生活

俗にアンニヤ村、ニンプジャヤー、ヤンザヤーなど呼んでゐるが、實際は久場川町の一部になつてゐる。この遊藝の内懐に家はたつた三軒、これだけが、所謂アンニヤ村であるといふ。このささやかな部落は、巧みに自然を利用して風害を避け
てゐる。

家は一般農家と同じやうに、母屋（大窓）炊事屋（トウング）をから成り、そして何れも軒の低い蘆葺き出しの古風な挿立小屋である。母屋には床を張り、佛壇を設け、炊事屋には床は無く、土間になつてゐる籠を構へてゐる。井戸は炊事屋の西南にあり、便所は北にある。家畜としては豚・鶏・山羊などを飼養し、庭には佛桑花が真紅に咲いてゐた。

この敷地内で最も特徴と思はれるものは、阿彌陀佛の扁額を掲げてある方四尺ばかりのお宮のあることで、これが彼等の生活の基準をなすものであるといふ。このお宮の神壇は至極簡素で、香爐と花瓶を供へてあるばかりである。彼等の語る所に據れば、この佛加那志（加那志は最上の接尾敬稱語）は、これを盗んで行つて密かに土中に埋めて置いても自然に露出し、又佛加那志の腹に石を結び付けて水底に沈めて置いても、いつの間にか浮き上つて獨りで歸つて來るといふことである。而もこれを盗

チョンダラー関係資料の収載曲目

『沖縄県史編纂史料』 念仏歌 1914頃	山内盛彬 『琉球王朝古典秘曲の研究』 琉球念仏1964	宮良当壮『沖繩の人形芝居』 1925	富名腰義珍『京太郎の歌』 1925	沖繩市 泡瀬の京太郎
		1.脚知行の歌	4.脚知行	3.脚知行の歌
		3.聖門の詞	1.京太郎	
		4.念願の文句		
		5.京の下り	2.扇子舞	2.扇子の舞
1.親の御恩 9.親の御恩	a.親の御恩 (楽譜)	6.浄土宗の文段		
2.まゝ親 11.継親念仏	c.継親念仏	8.継親念仏	6.口上念仏	
3.天中世界 14.天神世界	i.天じん四海 j. (異種) 天じん四海			
4.梅のたんぎ	n.梅のたんぎ			
5.阿の経 17.阿の経	l.阿の経 l. (異種) 阿の経			
6.春咲花	o.春咲く花			
7.ちやうじやの流 12.仲順流	g.仲順流れg.戯曲仲順流れ p.長者の流れ	9.長者の流れ		
8.親しくん	b.親しくん 楽譜			
10.天じやうがく	e.天じやうがく			
13.親のぐふだん	h.親のぐふだん	7.浄土宗が孝論		
15.花ぐだん	j.花ぐだん			
16.山武士	k.山武士	2.山伏		
		10.馬舞者	3.馬舞者	4.馬舞者
		11.鳥舞し舞	5.鳥さし舞	5.鳥舞し舞
	d.あく			1.早口説
	f.万才			
	m.女だんち			

んだ者は、必ず病死の厄を免れないと謂つてゐた。
吾々を案内して呉れた男には、四十歳前後の妻君があり、そしてその間には二人の女の子がある。姉娘は大阪の某工場へ出稼ぎに行き、妹は今年尋常三年生で、頗る踊が上手であつた。その隣の十歳ぐらゐなる男の子供は、又見事に三味線を弾いて、登り口説を歌つて聞かして呉れた。現今彼等は専ら農業に従事し、主として甘藷や野菜なまきを作つて日常生活に充てゝゐるさいふこゝである。

男は手足を洗つて、吾々よりも先に家に入つて着物を着替へ、座敷を掃いて妻に命じてお茶を入れさせてゐた。この時私は床屋さんに内證で、この男たちは何を一番好むかき聞くに、酒であるとの返事であつた。それで早速泡盛酒とお菓子を買ひに遣つた。時に又男はその仲間をもう一人呼ばしめた。使の者と共に入つて来た男は、まだ三十五六歳ぐらゐの壯者で、軍隊生活の経験を有する者であると言つてゐた。年取つた方の男即ちチョンダラーの親分は玉城太郎で、若い方の男の名はヤマ(山)さいといつてゐた。それから互にお菓子を掴みながらお茶を啜み、酒を酌み交して寛談に移るに、彼等にも吾々に何等悪意を抱いてゐない、さいふこゝが分つて、固く結んでゐる心を漸く緩めて腹藏なく語つて呉れた。これが縁となつて私はその翌日も、出掛けて行つて話を聞き、頗る見せて貰つた。實に得難い愉快なる採集であつた。

6-2. 山内盛彬 (1890-1986) の

チョンダラー研究

a. Uya nu guun Tarā Tamagushiku
親の御恩 太郎玉城

♩ = 54 ○は鉦

Na mu a mi - da n bu chi - ya -
- mi - ra n - fu tu - ki u ya -
nu - wun yo u - gu nu - ya fu -
ka - shi mu - nu Chi chi - gu - ga yo
- u - gu nu - ya u - mi - fu

(山内盛彬「琉球王朝古典秘曲の研究」p.230-231より)

7. 継親念仏

※池宮正治『沖繩の遊行芸 チョンダラーとニンプチャー』1990より

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1 みちりぬくるにや うやむるち | 三つの頃には 親を(あの世に)戻して |
| 2 いちぢぬとうしにや うやうむてい | 五つの年には 親思て |
| 3 ななぢぬとうしにや うやとうめてい | 七つの年には 親を探し求めて |
| 4 くにくにさまぎま みぐりむ | 国々様々 廻れども |
| 5 わがうやににゆるひとつ うがまらん | 我が親に似る人 拝まれぬ |
| 6 すりからもろいて もとにちく | それから戻つて 元に着く |
| 7 にかしぬうふすめー はいいちゃてい | 昔の大主前(爺さん)に 行き会いて |
| 8 まじまちみそりよ うふすめよ | まず待つて下されよ 爺さんよ |
| 9 いやよめのあていなしぬ わんゆしむ | イヤヨメの(不明) 幼子が我れを止める |
| 10 わがゆしなにすゆる くとややりわ | 我れがよしなにする ことなれば |
| 11 くにくにさまぎま みぐりわん | 国々様々 巡つても |
| 12 わがうやににゆるふひとつ うがまらん | 我が親に似る人 拝見できない |
| 13 たんでいしうふすめよ みしみそり | どうか爺さんよ 見せ給え |
| 14 あていなしわらびに たぬまりてい | 幼し童に 頼まれて |
| 15 いやがうやまるにや うがまらん | 汝が親常(まど)には 拝まれぬ |

16	しちぐわちたなばたぬ なかぬとうか	七月七夕の 中の十日
17	ぐそーゆーぬななぞーぬふいらくとうち	後生世の七門の開く時
18	くらぐしたくさんに ちりためてい	管串沢山に切りためて
19	にじりぬみすりにん うしくみてい	右の御袖にも 押し籠めて
20	ふいじゃいぬみすりにん うしかくち	左の御袖にも 押し隠して
21	くらぐしみーから ちゅみうがり	管串の目(孔)から 一目拝見し
22	うむかじくくるに たみうがり	面影心に 溜め拝んで
23	ぬがしじあんまや んまにめーる	どうして母さんは そこに居られるのか
24	ぬがしじかなしんぐわや くまにちよーる	どうして愛し子はここにきているのか
25	くぬぐるちちぐが ははとうめてい	最近父御が 継母を婚めて
26	ままうやあんまとう ふいれーならん	継母の母さんと 交際が出来ない
27	うちにしくらがみに しちいめん	内にし暗がりに していなさる
28	あくゆくらんらんに たくりめん	悪欲段々(さまさま)に 謀んでいなさる
29	わにんしあんまとう ちゅみちなら	我れも母さんと 一道(一緒に)なろう
30	ぬがしじかなしんぐわや あんいちくみる	どうして愛し子はそう言ってくれるのか
31	いあんちゅいなかくしん たていていちえーん	お前一人(だけでも)この世界に 立ててきた

25

32	むとうぬやかたに うしむるてい	元の屋形に 押し戻って
33	ちゃとーゆぬはちぼちんまちていくり	茶湯湯の初々も 祭ってくれ
34	むんぬはちぼちん しきていくり	物の初々も 供えてくれ
35	あけじよになていちよーていうきとーらい	蜻蛉になって来て 受け取るよ
36	はべるになていくわ うやとり	蝶になって来れば 親と思え
37	なちぬなちぐりん あみとうむな	夏の夏雨も (ただの) 雨と思うな
38	ふゆぬしむがきん しむとうむな	冬の霜掛けも (ただの) 霜と思うな
39	あさゆさあんまが ならとうむり	朝夕母さんが 涙と思え
40	うやぬいちんぐとうや くりふるろ	親の意見事(教訓)は これ程ぞ
41	くりちちむぬしり はちぬくわ	これ聞き識れ 初の子よ
42	んーなむあみだんぶつや みーらんふとうき	んー南無阿弥陀仏や 阿弥陀仏
43	ふいじゅーなにぐとうむんや うやぬたみどうなる	常に何事も物は 親の為にぞなる

26

継親念仏の構成

1) 1~22 前半部

遺児が母の面影を求めて国々を巡る

2) 23~41 後半部

後生の母と対面し先祖供養の教えを受ける

3) 42~43 集結部

阿弥陀仏の功德を説く

27

本土の浄土系仏教思想などとの関係

- ・「春咲花」「花ぐだん」 肉体の朽ちゆく過程の描写
→『来迎寺六道絵』
- ・「継親念仏」 異界訪問譚の世界観
→説教節『小栗判官』
- ・「長者流れ」 儒教的内容
→中国由来の「二十四孝」

28

7-2.山武士

※『山内盛彬著作集第二巻』1993より

- 1 大和に生れた山武士ど
- 2 すぢよ世に沖繩に打ち渡で
- 3 打ちゆたる鐘小やひぢにさげ
- 4 打ちゆたる榎木小や腰にさし
- 5 七まし袋や首にはち
- 6 組物編笠頂にかみ
- 7 七ふしだしちやぐふとちち
- 8 この森上ても村見らん
- 9 あの森上ても村見らん
- 10 此屋の中にものたのま
- 11 一夜の宿借らちくいり
- 12 一夜の宿やても貸らしんば
- 13 人一人重めば米のたへる
- 14 米のたえれば水のたえる
- 15 水のたえれば薪のたえる
- 16 一夜の宿やてもからしんば
- 17 先づ待て童歌よまい
- 18 天から下(ウ)てゆる露でんす
- 19 野原の草葉に宿とゆい
- 20 山武士生れて宿ないらぬ
- 21 破れた門んたに宿とやい
- 22 夜の夜中に雨降らち
- 23 裾とて絞れば袖ぬれて
- 24 袖とて絞れば肩ぬれて
- 25 何時か此夜もあけ(キ)らまし
- 26 元の大和におし戻て
- 27 この中の哀りも語り欲しや
- 28 此後山武士に生れるな

29

8. 念仏歌門付けの習俗

八重山のアンガマ

八重山諸島の石垣四箇などに伝わる儀礼集団芸能。祖先を表わすと言われる翁(ウシュマイ)と姫(シミ)の仮面を付けた二人を先頭に、若者達が家々を訪ねて問答を繰り返しながら、「無蔵念仏」など念仏系の歌や踊りを披露する。



八重山への念仏歌謡の伝播について

八重山の念仏歌謡は、宮良親雲上長重によって那覇から伝えられたとし、さらにこれらはチョンダラー系統のものではなく、袋中上人の系統を引く浄土宗念仏であったとされる。(新城敏男「宗教(2) - 仏教の伝播と信仰 -」)

30

那覇市国場の念仏エイサー



旧七月十五日の夕方、ムラヤーに男女が集まり、歌三線四・五人、酒瓶担ぎ役二人、ハヤシ役(多いほど良い)に分かれ、ムラの各家を東西に分かれて回った。各家庭では、普通の家では《はなぐらん》を、ミイサ(身内が亡くなって一年以内の家)では《いちちいぬ》を歌って先祖を供養した。念仏歌には踊りは付かない。次の《サウエン節》になって軽い手踊りが加わり、次の家へと移って行く。各家庭とも、一行が帰ってからウークイ(御送り)をした。家回りが終ると、一行はムラヤーに集まって、各家からいただいた酒で酒盛りをした。

(『エイサー360度 歴史と現在』より)

31

9. 民俗芸能へのチョンダラー芸能の伝播

沖縄市泡瀬の チョンダラー



由来：泡瀬村新立三年後の明治36(1906)年、新たに籠(コー)が仕立てられた祝いの出し物として、京太郎芸能が上演された。上演の若者達は首里寒川芝居の役者から習い覚えた。以来村芝居や村内の祝儀の際に演じられてきた。1958年、泡瀬京太郎保存会を結成。1980年、沖縄県指定無形民俗文化財に指定。

演目：1. 早口説 2. 扇子の舞 3. 御知行の歌 4. 馬舞者 5. 鳥刺し舞

32

読谷村長浜「京太郎」

芝居仕立ての演目。百年ほど前に那覇の仲毛芝居から習ってきた。京太郎に扮した三人の道楽者が飲み食い代を捻出するために那古野知で芸を披露している時に、これを取り締まる本物の「やんざい頭」に捕えられるという筋書き。三人の青年が金の算段をする「掛け合い」の場、「寺廻者（ていらまーさー）」・「鐘開き」・「馬舞者（んまめーさー）」部分、そして「やんざい頭に見つかる場」の三部構成。

特徴は、本来は操人形の舞台だった**破風型の寺**（ていら）をもって出る所、**ハッチブラー**という仮面をかぶる所。途絶えていた京太郎の復活は昭和57年で、40年ぶりの復活とのこと。



狂言「京太郎」(読谷村長浜)

宜野座村宜野座「チョンダラー」

明治33（1900）年、**新渡久地のタンメー**が、那覇の泊から妻子を連れ移住してきたが10年後に首里に引き上げ、寒川芝居に入って芸に打ち込み、60歳になり再び宜野座に戻ってきた。新渡久地のタンメーは寒川芝居で覚えた京太郎芸を教え、豊年踊りの時に演じさせた。出演者は**太鼓1人、馬舞者1人、踊り手6人**で、三線は楽屋で「早口説」の伴奏のみ。まず馬舞者を先頭に太鼓打ちが続き、下手から「早口説」を歌い出してくる。次に踊り手が「早口説」で出る。この後、馬舞者と太鼓打ちは下手前に座り、踊り手は三列縦隊になり座る。馬舞者と太鼓打ちが次の歌を4節まで歌った時に踊り手は立って踊り出し、時々ハヤシをする。こうして踊り手は最後に幕に入るが、馬舞者と太鼓打ちは残り、馬舞者が中央に出てひょうきんな動作をしながら文句を唱えると太鼓打ちが合いの手に太鼓を打ってはやし、しばらくこれを続けて終る。



34



名護市呉我「義民（京太郎）」



大正初期、首里久場川出身の**玉城金三**（1878-1957）が創作・指導して伝えられたという。あらずじは、ムラの祝いに地頭代の名代として出席した侍が、百姓の青年に相撲で負けたことを恨み刀にかけて殺してしまう。それを知った村の青年達は敵を取るためにアンニャ村に通いチョンダラー踊りを習う。アンニャ村の若衆に身をやつて敵の侍を招き寄せ、習い覚えたチョンダラー踊りを演じてみせる。踊りに喜んで金一封を渡そうとする侍に対して、青年達は自分たちが伊佐村の青年たちであり、敵討に来たことを告げて取り囲み、討ち果たす。**念仏節**から始まり、**ウシテイの唄**、**サイトリサーンの唄**で終る。踊りの半ばに**馬舞者**という三人の道化役が出る。三人とも競馬の物まねをしてこっけいな語りで演じる。ここでは、寺（ティラ）を首からかける点が、チョンダラーのフトッキ（人形）遣いの姿を彷彿とさせる。また、他の民俗芸能にはない念仏節を伝えている点は貴重である。

読谷村楚辺の庭念仏



イリベーシは神の降臨を願望し、太鼓と護身の型で座を清める舞踊である。アシビをする度に座直しとして最初に演じられてきた。エイサーで各家の屋敷に入る始めの時にいったという伝承もある。武士手、武士と呼ばれる空手風の踊りを踊る。終わりに**庭念仏**という念仏歌が歌われる。（飯田くるみ「読谷村楚辺における念仏歌の伝承について-イリベーシを中心に-」）

36

エイサーで向かいの念仏歌が歌い継がれたことや、イリベシで庭念仏が歌われていることは、楚辺に念仏者が出入りしていたことと関係がありそうである。

明治時代には通称**花打のおじい**（比嘉浦戸）が、大正の初め頃には通称**マッチャー**という人物が楚辺で念仏者をしていた。（中略）

マッチャーが得意だった種類は「継親念仏」「仲順流り」「山伏念仏」であったというが、楚辺のエイサーで現在歌われている念仏（継親念仏）は、昭和2年に楚辺の地謡方が集まって、七月二十日のサンジャグラーのときに歌う「継子念仏」の稽古をしているところに物乞いが来て、彼に指摘された間違いを改めたものを比嘉順榮氏が習った皆に教えたものだという。

（飯田くるみ「読谷村楚辺における念仏歌の伝承について—イリベシを中心に—」）

10. 舞台芸能への影響

組踊「万歳敵討」

(18C 田里朝直作)



田里朝直による敵討物の組踊で創作年代は18世紀中といわれる。あらすじは、高平良御鎖は、大謝名の持っている名馬を望んだが応じないため、闇討ちにする。大謝名の子供である謝名の子と慶雲は万歳姿に身をかえて、その仇を討つというもの。全体は五段に分けられる。第一段は、謝名の子の出現。第二段は、謝名の子が弟の慶雲を訪ね、父の仇を討つことを誓い合う。第三段は、高平良御鎖の出現。仏壇に山鳥が入ったのを不吉に思い、世の習わし通りに家族で浜下りをする。第四段は、謝名の子と慶雲の道行で、高平良一行が小浜湾で寝をはっているのを見かけ出かける。第五段は、謝名の子と慶雲が万歳芸を披露しつつ、見事に父の仇を討つ（『琉球芸能事典』より）

「万歳かふす節」「おほんしやり節」「さいんする節」

組踊「義臣物語」

(18C 田里朝直作)

田里朝直による組踊で創作年代は18世紀中といわれる。あらすじは、島尻の世の主高嶺按司は行いが悪かったので、首里の鮫川の軍勢に滅ぼされた。高嶺の若按司は、姉と逃げのびて、高嘉良の村頭の山小屋に隠れていた。一方、按司の勘気触れ、身を退けていた**国吉の比屋**は、**玩具（註：人形）売り**に身をやつして若按司を尋ねあて、織名の花城の比屋宅にかくまう、国吉は単身で鮫川の城に火攻めをかけたが捕らえられる。しかし、鮫皮は国吉の志をほめ、親の罪は子に及ばずと、若按司に領地を与え、高嶺の按司のあとを継がすことを約束する。（『琉球芸能事典』より）

歌劇「奥山の牡丹」

当代の人気役者であった伊良波尹吉が、ライバルの我如古弥栄の歌劇「泊阿嘉」に刺激されて作った。ものがたりは、首里の平良殿内の嫡子**真三良**は、妾狂いしている父に母と共に家を追い出され、田舎で百姓をしながら貧しく暮らしていた。ある夜、**物乞い勢頭の娘**とも知らず恋をした。二人は恋仲となり娘は男の子を産む。後お互いの身分を知り、女は出世のさまたげになるからと、生まれた男の子を渡して身を引く。一方、妾は真三良と母を家から追い出した上に殺そうとするが、**母子を密かに見守っていた勢頭の娘**に助けられる。

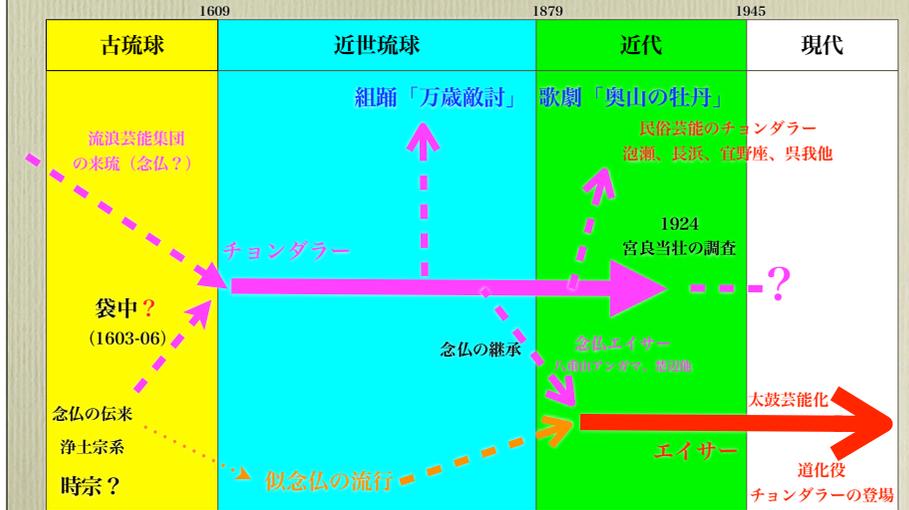
それから十七、八年後、真三良と勢頭の娘の間に生まれた子は**真山戸**と名付けられて成長し、父に自分の母は生きているのか死んだのかと聞く。父の真三良は母は山原で元気にいるらしいという。真山戸は父の許しを得て、山原の奥山で独り暮らしをしているらしい女がいると聞き捜しあてると、その人はまさしく自分が捜し求めていた母であった。母は自分の生んだ子に逢えてうれいものの、我が子に**母が身分の卑しい非人の子**とわかると、出世の邪魔になると崖から身を投げて死ぬ、という筋のもの（『琉球芸能事典』より）。

特徴：

- 主役の勢頭の娘が**チョンダラー**出身。
- 「センスル節」、「仲順節」、「親のウゲン節」など**チョンダラー系楽曲**を導入している。
- 馬舞者などの踊りも登場する。
- 「**継親念仏**」などからの**語句の引用**も随所に見られる。
- チョンダラー芸能をよく研究した上で作劇されている。

41

1.1. 沖縄におけるチョンダラー芸能の展開



42



参考文献

- 飯田くるみ「読谷村楚辺における念仏歌の伝承について—イリバシを中心に—」『ムーサ』NO.12 2011年
- 池宮正治『沖縄の遊行芸 チョンダラーとニンブチャー』ひるぎ社、1990年。
- 宇野小四郎『沖縄の人形芝居「京太郎」の研究』(財)現代人形劇センター、1984年。
- 大城学『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究』砂小屋書房、2003年
- 宜保榮治郎『エイサー 沖縄の盆踊り』那覇出版社、1997年。
- ぐしけんかなめ編『エイサーアンケート集約』エイサー研究会、1990年。
- 久万田晋『沖縄の民俗芸能論 神祭り、白太鼓からエイサーまで』ボーダーインク、2011年。
- 『第1回沖縄市芸能祭 チョンダラー芸能の系譜』沖縄市教育委員会、1995年。(公演パンフレット)
- 知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹社、1994年。
- 比嘉盛章「沖縄の人形芝居を読み」『宮良当社全集 月報』2~13 (1980~83年) (初出は『沖縄朝日新聞』1925年4月連載)。
- 宮良当社『沖縄の人形芝居』郷土研究社、1926年 (『日本民俗誌体系 第一巻 沖縄』<角川書店、1974年>所収、『宮良当社全集』第12巻<第一書房、1980年>所収)
- 山内盛彬『琉球王朝古謡秘曲の研究』『山内盛彬著作集 第2巻』沖縄タイムス社、1993年 (初版1964年)

44